

学生エリート養成プログラム

—日本、アメリカ、中国—

まえがき

本書の企画 本書は、学生エリートを大学の中で特別に養成するための学生エリート養成プログラムを取り上げるものである。ここでいう学生エリートとは、一つの大学の中で特に優秀とされる学生(群)のことである。“優秀”の定義はさておき、そのような養成プログラムは、20世紀前半にアメリカの大学で企画が相次いだ。その後今日にいたるまで、多くの大学で学生エリートの養成がオナーズプログラムという名称の下で行われている。日本や中国においても、類似の養成プログラムが稼働している。

そこで、日本、アメリカおよび中国で実施されている学生エリート養成プログラムの事例を紹介する。それとともに、高等教育における養成プログラムの位置付け、特徴、またプログラムを開発するにあたっての留意事項等をまとめている。日本において、この養成プログラムをさらに推し進めるために、本書を企画する運びとなった。

学生エリートの選別と養成プログラム では、なぜいま日本の大学で、学生エリート養成プログラムを検討する必要があるのか；日本の大学教員はこの企画に積極的であるのか：

いま、各国で、優秀な学生の資質をさらに伸ばすことに多大な関心が払われている。そこでは、学生エリートにはかなり高いハードルの課題が提示される。しかし、その要求に応えられなければ途中で参加資格を失う。厳しい課題や要求を突き付けるのは、学生エリートこそが、将来リーダーとして、高い志を持ち、それを実現しようとする強固な意思を持つことが期待されるからである。現実には、高度の知を援用しつつ、困難な社会的問題の解決、国家レベルでの責任ある意思決定、(科学技術研究の場合は)“自然”との厳しい闘い等に直面する可能性が高いからである。ときには、利害の衝突を引き起こしたりさまざまな駆け引きに引き込まれたりするなど、問題解決に極限の精神力が求められることもある。各国では、予期的リーダーとしての学生エリートを選別し、またそのような極限をも考慮しつつ、彼らの資質を徹底的に伸ばすような養成プログラムの開発・運用を推し進めているのである。学

生エリートのリーダー性が期待されているから、そのプログラムは、自ずと国家と社会に対する使命感の涵養が中心的課題の一つとなる。

では、この類のプログラム企画に対して、大学教員の反応はどうであったのか。10数年の間、折に触れてこの問題提起を行ってきた。そして、個別には積極的なご意見をいただいた。消極的なご意見もいただいた。しかし、概ね無反応であった。

かつて、ある大学教員が「優秀な学生は放っておけばよい」と言われたことがある。優秀学生に関する放置論とも呼べる。そのときの状況から、「優秀な学生であれば、いちいち学習の指示を受けなくとも、自分自身で“知”の実践を展開できるはずだ」という積極的な意味と解された。それはそれで理解できる。しかし、以下の2つの疑問が生じるのである：

- (1) もし、通常の講義、実験、実習を通して得られる内容を“知”と称するものとする、学生エリートが保持すべきは“知”だけなのか。
- (2) 学生エリートは、学力的には“高”のグループに属する。同じ経済負担の下では、“低”と“高”に養成措置の均衡が図られているのか。

まずは、(1)である。“知”は、その範囲が明確ではないものの、例として高度の専門知が挙げられる。グローバル人材に必要とされる外国語も挙げられる。そして、各人に求められる“知”の内容は、キャリアの方向によってそれなりに異なる。

しかし、どのエリートにも共通して求められる必須の要件は、“徳”とも呼ぶべき使命感である。本書で述べる“徳”とは、習慣的信念に基づいた使命感である。“信念”は、公私さまざまな場面で使用されるが、国家と社会に対するものを最優先に扱うことを趣旨とする。それは、公益を尊重する精神とも言えるし、奉仕の精神とも言える。また、国益を省益と比較したとき、国益を優先するのが先の趣旨に則ったエリートということになる。いま、多くの人が求めているのは、国家的・社会的使命感という高い志を持つ真正のエリートなのだ。

現実には、政官財のエリートの場合、国際的な利害に直結する場面に臨むことがあるだろう。そのときには、先の極限の状況と相成る可能性が高い。真正のエリートなら、如何なる状況においても個々に応じて巧みに自己コン

トロールできるような資質を持ち合わせているはずだ。だから、一口に“徳”とは言っても、状況に応じさまざまな段階の精神的様態が想定される。

“エリート”を、上に述べた“知”と“徳”を併せ持つ人材とみなすものとする。そのとき、自然の姿と思われる様態は、「知性が高ければ徳性も相応に高い」という均衡感である(図 5-2、p.81)。「自然界の樹木は、背が高ければ根も相応に深い」と同じことである(図 4-4、p.56)。人間の成長を樹木の生長になぞらえると、知性と徳性に不均衡な教育が、健全とは呼びにくいエリートを産み出しているのである。

このようにみると、先の放置論は、その前提として、如何なる人材像を想定としているのであろうかと、基本的な疑問が生じてくるのである。極限の精神力などは想定外の、まさしく平和な放置論なのだ。

次は、(2)である。学力での“低”と“高”を比較してみよう。“低”の養成措置に関しては、その学力資質や学習意欲に合わせたリメディアル等で処遇し、教育研究関心を寄せることが多い。また、その課題解決に特化した学術組織も存在する。しかし、“高”に焦点を当てた養成措置や教育研究は、殆ど見当たらない。特に、学生エリートは“超高”に属する。それに対する無関心さが、形を変えて、先の放置論を述べるに留めていると感じる。要するに、関心の持ち方が不均衡なのである。その2つの学生群の養成措置に関し、同じ経済負担の下で、“機会均等”が満たされているのか否かに疑問が残る(図 1-3、p.10)。

さらに言うなら、“超高”に対しては、上記の均衡を突破した不均衡があってもよい。つまり、“超高”は、国家的・社会的使命感を含む資質が期待される予期的リーダーであるので、その養成に莫大な公的資金を投じるのである。国際競技での真剣勝負に向けて、トップアスリートに投じる巨額の資金を例に挙げれば、分かりやすいであろう。いわば人的公共投資である。

しかし大学の問題に立ち返ると、そのような施策は、単純には、何か学力的強者だけを優遇し弱者を見捨てているようにも見える。だが、その見方は誤りである。むしろ逆である。敢えて古い表現「弱きを助け、強きを挫く」を一部借用するのなら、「弱きを助け、強きを伸ばす」ための均衡突破なのである。その「強きを伸ばす」なる教育的行為の骨格に、国家的・社会的使

使命感の涵養を充てるのである。そして、強者に対して、その使命感に基づいた意思や行動が、自然にほぼ無意識に現れるように計らう。具体策はともかくとして、そのように計らえば、弱者は、強者の実利に無縁に近い存在であっても、相応の恩恵を受けることができるようになる。その結果、弱者も弱者なりに努力を積み重ねる素地が整うことになる。いわば正循環の施策構造が形成される。

すなわち、本書でのプログラム紹介を通して最も主張したいことの一つは、国家的使命感と社会的使命感の徹底した涵養である。これを推し進めれば、強靱かつ包容の国家・社会の形成に寄与することができる。

一方、グローバル化時代という現実の下では、外国との関係も重要である。学生エリートの養成措置を凶ろうとしない国は、将来が危うい。情報・輸送インフラが発達したいま、ある程度は他の関連国の手法に追従しないと、国際競争・協調で遅れを取る。また、“知”の不用意な流出を招く。日本の大学がこのような緊急事態を視野に入れつつカリキュラム開発をしようとするのであれば、いますぐ、学生エリート養成プログラムを検討する必要があるのだ。エリート養成を軽視すれば、優秀な高校生や大学生は、自ずと“超高”の学力を制度的に評価してくれるような外国の大学を選好する。一種の頭脳流出である。その結果、日本の大学はいわば滑り止めの大学と化す。そして、日本全体が学力的な地盤沈下を引き起こす。

“知一徳”および“低一高”という2つの均衡はいずれも、これを教育課題として捉えて見ると、やや根の深いものを感じる。この課題を正面から取り上げ議論を深めるには、それに相応しい新たな環境が必要である。そのためにも、“エリート / リーダー養成”を広域に扱う専門的学術団体の創設が求められる。一種の学術均衡である。「強きを伸ばす」ための学術的組織化である。課題として、下記の「エリート養成の存在と内容」のテーマが含まれる。将来の“教育の姿”を視野に入れての、長い過去の教育活動に対するレビューも含まれる。

エリート養成の存在と内容の混同 “エリート”は、国家・社会を代表する重要な存在である。しかし、日本では、エリートという言葉が積極的な意味ではあまり使いたがらない。むしろ、不問に伏す傾向がある。いわば、マイ

ナスイメージである。なぜそうなのか。その理由は、以下のように分析できる：

目標を一にする集団の中から何らかの基準で選ばれた人たちは、エリートと呼ばれる。そのように選ばれると、エリートには、自ずと一般人に対する差異化意識が芽生える。さまざまな優遇措置の運用に伴い、特権意識もそれなりに高まる。そして、一般人は、そのことをよく知っている。問題は、そのような被選別感(または優越感)と、エリートに養成された国家的・社会的使命感とを天秤に掛けたときに、後者が前者に優っているか否か、である。ここで言う使命感は、ノーブレスオブリッジと呼ばれるものに近い。そして、一般人にとって、使命感が被選別感に優るようなエリート言動とを感じるなら、プラスイメージを引き起こす。逆なら、マイナスイメージとなる。要するに、そのプラス・マイナスは、両者の比較結果に直接依存して定まるということである。したがって、たとえマイナスを引き起こしたとしても、エリート養成の存在に問題があるのではない。養成の内容に問題があるのだ。そこに混同があると、“エリート”なる文字列を見ただけで、マイナスイメージが現れる。もしマイナスを感じたら、当該養成プログラムに使命感を扱う養成内容を強化する必要があるのではないかと、プラスの問題提起をすべきである。使命感が被選別感に優るようにエリート意識を涵養することが、エリート養成の一大使命なのである。

特に国公立大学の場合には、エリート性の高い大学ほど、国家的・社会的使命感の徹底した涵養が求められる。さらに、“エリート”なる用語に関して、“不問に伏す”という風潮を払拭しプラスイメージと相成るよう健全化を計らうことが必要である。その努力義務が、教育研究者に求められる。

本書の内容 予期的リーダーの資質を伸ばすため、いま日本の大学に求められるのは、学生エリート養成プログラムの開発と運用である。如何なる養成プログラムが日本の学生に相応しいのか。その模索に資する情報を提供したいとの趣旨の下、本書を構成した。

本書には、新旧さまざまな大学情報が混在する。いずれの事例からも養成プログラムの開発方針や運用方法を垣間見ることができる。養成プログラムを企画する際、その参考になれば幸いである。

各章の内容は、次のとおりである：第1章～第4章では、学生エリート養

成プログラムについての全般的な事柄を述べている。プログラムを企画するにあたって、その足場作りに資することを趣旨とする。第5～第7章では、養成プログラムの事例を個別に取り上げている。いわば資料集である。その比較検討により、プログラム内容等の案出に資することを趣旨とする。

第1章は、学生エリート養成プログラムの意義と枠組である。最初に、養成プログラムの実施状況を概説する。続いて、大学で養成プログラムを開発することの意義や必要性を述べる。また、学生エリートに対する特別措置の類型を示し、養成プログラムを含めて全体の枠組を提示する。これは、如何なる特別措置が相応しいかを比較検討するための枠組である。

第2章は、学生エリート養成プログラムの背景と位置づけである。そこでは、高等教育を取り巻く社会の背景や変化を述べ、それらに対する養成プログラムの位置付けを図る。背景として、知識社会化、国際化・グローバル化、(高等教育の)ユニバーサル化の3つをとりあげる。そして、それらの関係を図式的にまとめる。これは、社会の背景を俯瞰しつつ、当該養成プログラムを大学教育に位置付けるための図式モデルである。

第3章は、日本、アメリカ、中国の学生エリート養成プログラムの特徴である。アメリカにおけるオナーズプログラムの発展の経緯をまとめ、続いて、各国で実施されてきた養成プログラムの特徴、統計的情報等を紹介する。その特徴等に基づいて、第1章でまとめた枠組を補完する。

第4章は、学生エリート養成プログラムの管理運営である。ここでは、アメリカのオナーズプログラムの管理運営とこれにまつわる話題を紹介する。適切な管理のためにオナーズディレクターの資質が重視されていることを述べるとともに、日本への示唆を述べる。また、養成プログラムに関連して、学生エリートの資質を優力および秀力という観点でまとめる。最後に、プログラム企画にあたっての留意事項に言及する。

第5章は、日本の大学の個別事例である。学生エリート養成プログラムを実施している大学のうち、九州大学、筑波大学等、5つの大学をとりあげる。そして、各カリキュラム内容等を紹介し、全般的な考察を行う。

第6章は、アメリカの大学の個別事例である。オナーズプログラムを実施している大学のうち、50の公立大学をとりあげて、オナーズカリキュラム

の内容を紹介する。

第7章は、中国の大学の個別事例である。養成プログラムを実施している大学のうち、40の主要大学をとりあげて、カリキュラムの内容を紹介する。

本書には、養成プログラムとオナーズプログラムの2つの表現が混在する。その理由はいくつかある：アメリカでは学生エリートを対象としたプログラムが概ねオナーズプログラムと呼ばれているのに対し、他の国ではそうとは限らない。プログラムの特徴や運用の仕方も、国によって同じとは限らない、等々。そこで、アメリカの場合は“オナーズプログラム”を用いた。一方日本と中国の場合は、総称としては“養成プログラム”を用い、個別には当該大学での呼称をそのまま用いた。したがって、章・節により、これらの用語が混在することがある。

本書の制作の動機は、東信堂下田勝司社長との談話の中から生れた。作業開始までにしばらく時間を要し、その後も時間を要したが、このたび最終原稿にこぎつけることができた。途中で、記述が“上から目線”と感ずることもあった。長期間を要したが、同社長からは折に触れて有益なアドバイスをいただいた。学生エリートの養成プログラムに理解を示してくださった下田社長と編集でお世話になった方々に感謝を申し上げたい。

平成29年6月

北垣郁雄

学生エリート養成プログラム／目次

まえがき	i
第1章 養成プログラムの意義と枠組	3
1 学生エリートの特別措置 (3)	
2 「高低の教育均衡」と養成プログラム (6)	
3 特別措置の枠組 (10)	
第2章 養成プログラムの背景と位置づけ	14
1 社会の背景 (14)	
2 2つのエッセンス—技術革新とリーダーシップ— (16)	
3 高等教育の図式モデル (18)	
4 国際化、グローバル化、そしてグローバル化 (22)	
第3章 養成プログラムの展開と特徴	26
1 “オナーズ”の展開 (26)	
2 養成プログラムの統計的特徴 (28)	
3 養成プログラムの比較 (32)	
4 全般的特徴 (38)	
第4章 養成プログラムの管理運営	41
1 ファカルティとアドミニストレータ (41)	
2 ディレクターの選抜と職務属性 (44)	
3 ディレクターの資質と工学 (48)	
4 養成プログラムの類型と企画 (57)	
第5章 資料集1：日本の5大学	62
九州大学 21世紀プログラム (63)	
新潟大学 副専攻プログラム (70)	
愛媛大学 学生リーダー養成プログラム (76)	
筑波大学 大学院オナーズプログラム (80)	
金沢工業大学 KIT オナーズプログラム (89)	

第6章 資料集2：アメリカの50公立大学 …………… 93

【東海岸】

- | | |
|--------------------|------------------------|
| イーストカロライナ大学 (97) | ニューヨーク市立大学、 |
| クレムソン大学 (98) | ブルックリン校 (115) |
| サウスカロライナ大学 (101) | ノースカロライナ大学、 |
| サザンメイン大学 (102) | ペンブローク (118) |
| ジェームス・マジソン大学 (104) | ノースカロライナ州立大学 (119) |
| ニューヨーク州立大学、 | マサチューセッツ・アマースト大学 (121) |
| ストーニブルック大学 (106) | マサチューセッツ・ローウェル大学 (123) |
| ニュージャージー工科大学 (108) | メリーランド大学、 |
| ニューヨーク市立大学、 | カレッジパーク (125) |
| クイーンズ校 (110) | メリーランド大学、 |
| ニューヨーク市立大学、 | バルチモア (126) |
| ハンター校 (112) | ラッドフォード大学 (128) |

【東海岸～中西部】

- | | |
|----------------------|-------------------|
| アラバマ大学、タスカルーサ (130) | オハイオ州立大学 (146) |
| アラバマ大学、バーミングガム (133) | グランドバレー州立大学 (147) |
| イーストテネッシー州立大学 (135) | シェパード大学 (149) |
| イリノイ大学、 | セントラルフロリダ大学 (151) |
| アーバナ・シャンペン (138) | テネッシー大学 (153) |
| インディアナ大学、 | テネッシー工科大学 (154) |
| ブルーミントン (141) | ノースフロリダ大学 (156) |
| ウィスコンシン大学、 | フロリダ州立大学 (159) |
| オークレア (142) | ボール州立大学 (160) |
| ウェスタンイリノイ大学 (144) | ミシシッピ州立大学 (161) |

【中西部～西海岸】

- | | |
|--------------------|---------------------|
| アイダホ大学 (163) | サザンイリノイ大学 (175) |
| アリゾナ大学 (165) | テキサス大学、オースチン (177) |
| エンポリア州立大学 (167) | テキサス州立大学 (179) |
| オクラホマ大学 (168) | ネブラスカ大学、リンカーン (180) |
| オクラホマ州立大学 (169) | パデュー大学 (182) |
| カンザス大学 (170) | ミズーリ州立大学 (185) |
| コロラド大学、ボールダー (172) | ユタ州立大学 (186) |
| コロラド州立大学 (174) | ワシントン州立大学 (188) |

第7章 資料集3：中国の40主要大学 190

中国科学技術大学、安徽省 (192)	上海交通大学、上海市 (229)
華南師範大学、広東省 (193)	西安交通大学、陝西省 (231)
中山大学、広東省 (195)	西安電子科技大学、陝西省 (233)
吉林大学、吉林省 (197)	西南大学、重慶市 (234)
廣西大学、廣西省 (198)	浙江大學、浙江省 (236)
東南大学、江蘇省 (199)	南開大学、天津市 (237)
南京大學、江蘇省 (201)	清華大学、北京市 (238)
南京師範大学、江蘇省 (202)	对外經濟貿易大学、北京市 (240)
南京理工大学、江蘇省 (203)	中国人民大学、北京市 (242)
ハルビン工業大学、黒龍江省 (206)	北京大学、北京市 (243)
湖南大学、湖南省 (208)	北京科技大学、北京市 (245)
中南大学、湖南省 (209)	北京化工大学、北京市 (246)
華中科技大学、湖北省 (211)	北京工業大学、北京市 (247)
中国地質大学、湖北省 (213)	北京航空航天大学、北京市 (249)
武漢大学、湖北省 (216)	北京交通大学、北京 (251)
四川大学、四川省 (218)	北京師範大学、北京市 (253)
西南交通大学、四川省 (221)	北京理工大学、北京市 (255)
華東師範大学、上海市 (222)	北京林業大学、北京市 (256)
華東理工大学、上海市 (225)	大連理工大学、遼寧省 (257)
上海大学、上海市 (227)	遼寧大学、遼寧省 (260)

日本の大学名表.....	62
--------------	----

アメリカの大学名表—州別—.....	94
--------------------	----

中国の大学名表—省別—.....	191
------------------	-----

あとがき.....	263
-----------	-----

索引.....	267
---------	-----

編著者紹介

北垣 郁雄(きたがき いくお) 1947年生

東京工業大学工学部卒業、同大学院理工学研究科修士了

広島大学名誉教授、東京都市大学客員教授、工学博士

専門：教育学、大学教育論

「大学力」ミネルヴァ書房(共編著)、2006. 「科学技術時代の教育」ミネルヴァ書房(共編著)、2007. 「ファジィ教育情報科学」早稲田大学出版部(分担執筆)、1995. ほか。

ICVL 2008 Excellence Award “Intel® Education” (Romania) 受賞.

編集協力 黄 福涛

広島大学 高等教育研究開発センター 教授

編集協力 藤井 宣彰

県立広島大学 生命環境学部 准教授

学生エリート養成プログラム——日本、アメリカ、中国——

2017年 6月20日 初 版第1刷発行

[検印省略]

定価はカバーに表示してあります。

編著者©北垣郁雄／発行者 下田勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替 00110-6-37828
〒113-0023 TEL(03)3818-5521 FAX(03)3818-5514

発行所
株式会社 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan
E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1356-8 C3037 © KITAGAKI, Ikuo